

な中途半端なままとなり、試合もさ
んざんな結果に終わってしまった。

このくらいはできるだろうという
思い込みをせず、目の前にいる選手
は何ができて何ができないのかとい
うことを、私自身が正確に読みとつ
ていたならば、もっと効果のあがる
指導ができたに違いない。まさにあ
りのままに見ることができなかった
よい例である。

試合後、私はこの反省をもとに、
選手一人ひとりの動きをありのまま
に見ようと意識した。すると、パス
やドリブル、シュートといったパス
ケットの基本技術があまりにも未熟
である選手が多いことが明らかにな
った。例えば、ある者は、目の前に
敵がいるのにもかかわらず正面から
ボールをパスしようとしたり、ある
者は、利き腕でしかドリブルをする
ことができなかったり、さらにある
者は、ジャンプシュートができない
と言った具合である。そこで、練習
時間の多くをこれら基本技術の習得
に費やすことにした。対面パスや目
をつぶってドリブルをするといった
簡単なものからはじめ、徐々に、デ
イフェンスをつけるなど複雑で実戦
的な動きを多くしていった。それと
同時に、選手の一つ一つの動きに対
し、良いところと悪いところを指摘
し、どうすればもっと良くなるのか

を示していった。このことを続けて

いくうちに、選手自らが判断するよ
うになり、今では、練習中に自分た
ちで指導し合うまでになっている。

その成果があらわれたのか、本年度
の大会では地区五位という好成績を
あげることができた。選手全員が中
学校で未経験のチームとしては大躍
進である。

あるがままの姿をありのままに見
る、このことばは、私にとつてあら
ためて重みのあるものとなった。

さて、初めてのクラスを持って間
もなく一年になろうとしている。も
う一度まっさらな透き通った眼鏡で
生徒たちを見つめていこうと思う。

(県立只見高等学校教諭)



初任者として

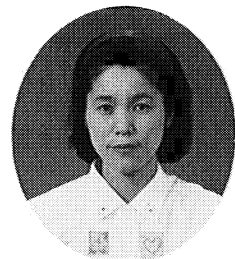
スタート

山口 玲子

「先生でしよう？先生、何年の先生
かな」

四月、着任した早々の朝の玄関で
の様子である。期待と歓迎の意味を
込めてか、五、六人の女の子が、車
から降りた私に、にこにこ顔でしか
も恥ずかしそうに駆け寄り、声を掛
けてくれた。初任地への着任と緊張
感、まだ見ぬ子どもたちへの期待と
不安から、こわばっていた私の表情
もいつべんにゆるみ、うれしい気持
ちでいつぱいになった。「よかった。
素直な子どもたちで」と思いながら、
胸をなで下ろしたものである。その
ときの子どもたちが、今私が担任し
ている三年生である。

これまで、いくつかの学校に補充
教員としてお世話になっていたが、
年齢的な制限から、正式採用は望ん
でも無理なことと理解していた。し
かし、数年前に制度が改められて門
戸が広げられ、私にも受験資格があ
ることを知ったのは、何よりもうれ
しいことであった。さらに幸運なこ



とに、夢であった小学校教員として
の新たな人生が今年度より始まった
のである。

四月からスタートした初任校での
勤務も、早いもので八カ月を過ぎよ
うとしている。恥ずかしそうに出迎
えてくれた子どもたちも、今では気
心が知れてきたせいも、にぎやかで
元気いつぱいの毎日である。

朝、出勤すると、寒い玄関先で白
い息をはあはあとさせながら、
「先生、見て見て。二重跳びができ
るようになったんだよ」

「先生、私のも見て。はやぶさ跳び
が、きのうよりも多くできるよう
なったんだから」

と、待ち構えて矢継ぎ早に自分の上
達ぶりを教えてくれる。

休み時間になると、早速、

「先生！」

「先生、あのね」

と、話しかけてくれる子どもたち。
うれしい限りである。明るく、屈託
のない子どもたちとの一日が終わる